

## 「根」をしっかりとはれ

ローダイ仏教会 宮地 信雄

人間というものは生まれたときから迷うようにできているのであろうか。生まれてからこのかた何かを決めるとき、これによしと潔く物事を決めることができたことが果たして何度あるであろうか。私に限っていえば、これによしと結論できたことはかつて一度もなかったとってよさそうだ。それほど、100%の決断というものはできないのではないだろうか。案外私達はそうしたと思っけていても、後で何らかの迷いや悔やみが出てくるのが普通ではないであろうか。人間というものは迷うようにできているのである。だからこれで間違いない絶対だといって行動に移すことができたならどれほどか安心できることであろうか。そういった決断を生きている限り一度でもいいからしてみたいものだと思う。親鸞聖人は、29歳の時、そうだこれでいいのだという決断をなさることができました。その時を親鸞聖人は、信心決定の時と判断されたようです。この信心決定の時というのは、この我々がなかなかできないでいる100%の決定をできた時と私は思います。この決定がなかったら親鸞聖人は、きっとこの世に生きながらえておられなかったのではないかと思うのです。あの生きるか死ぬかの瀬戸際で親鸞聖人は、生まれかわられたのです。本当の生きる意味を見いだされたのでしょ。その意味で親鸞聖人は迷うことなくこの世を生きることができたといえるのではないでしょ。迷いのない人生なのです。そんな人生を私達も送ってみようではありませんか。「根をしめて、風にまかせる柳かな」という歌があります。柳という気はとてもねばり強い木だそう。しかし、その外見は、細い枝となおやかな葉っぱとをいつも風になびかせているひ弱な木に見えるのです。しかし、どんな台風がきても、他の木がどんどん倒れるときでも、この柳の木はなかなか倒れないそう。それは、しっかりと根を大地にはやしているからなのだそう。しっかりと根を大地にはっているからこそ、地上に出た幹の部分はどんなにひ弱そうにあちらにふらふらこちらにふらふらしていても、決して倒れることのない木、それが柳なんだそう。浄土真宗では、こういう生き方を理想の生き方にしています。表面上はふらふらとして、一向につきみ所がないが、いざというときしっかりと根をはって動かない、つまり自分というものを決して見逃していない行き方なのです。親鸞聖人の行き方を見ているとよくそのことがわかります。その当時決して有名人でもなく、また国家の要人でもなかった聖人ですが、その行き方は、700年経った今でも多くの人を動かして止まないのです。こういう生き方こそが本当の生き方ではないでしょうか。その時その時の時流にあわせて生きて行く生き方とは雲泥の差があります。それもこれもしっかりと地中にはった強い強い信仰という根があるからこそなのです。しっかりと根をはっているからこそ、色々なその他の生き方、教えがまた自分のものになるのです。この根をしっかりとはることが一番大切だということを親鸞聖人の人生から戴くことができるのです。

ところで、来たる2月25日(日)は、仏教婦人会の創立者のお一人である九条武子夫人の追悼法要「如月忌(きさらぎき)」が厳修されます。お念仏に生きられた夫人のご一生は、まさに「根を占めて、風にまかせる柳かな」そのものであったと思います。この法要を通して、もう一度しっかりとお念仏のありがたさを味合わせていただきましょう。

南無阿弥陀仏